



卓話

卓話

「大学教育の現状-対話型教育の試み」

東京大学名誉教授・日本女子大前教授・学習院大前教授
国府田 隆夫氏

◇手応えがない 一知的仮死状態

日本女子大に移って、物理学概論を1時間半授業をしたとき、まったく手応えがないんです。「わかりましたか」と聞いても、学生は黙っている。



たまには、先生が一生懸命に学生に問いかけられるから、気の毒なので質問をしようという学生がいます。「先生、この字なんて読むのですか」と質問がありますが、私の書く字が汚いせいもあるんでしょうか、大抵はアルファートかベーターといった種類の質問です。

まったく試験になるまで黙っています。

それと、おしゃべり。携帯電話普及前は騒がしかったのですが、携帯電話普及後は一時静かになった。その原因は携帯電話でのおしゃべりに変わったからです。後方の席では携帯で外部との話に夢中で、私の話は聞いていません。

つまり、教師側と学生側に断絶があるわけです。

◇大学側と学生側の問題

大学側の主な問題は、次のものです。

1. 専門の細分化
2. 教員の研究教育意識:業績主義
3. 大学の多様化:エリート研究大学から職能教育大学へ
4. 教養教育の形骸化

学生側の主な問題は、次のとおりです。

1. 大衆化社会:進学率の増大(特に女子)、大学生の幼稚化
2. 幼年期から青年期の自己形成過程の変化
3. 選良教育(エリート)か公民教育か

◇テレビ画面と化す教壇

5年前の新聞に、養老孟司先生の「テレビ画面と化す教壇」という記事が載りました。要約すると、「学生たちにとっての教壇はテレビ画面と同じで、自分とは関わりがなく、どうしようもない現実だと見ている。教壇で彼ら彼女らが示す奇妙な挙動は、そう考えると理解できる」ということです。

この説は、私自身の経験ともよく符合するだけでなく、それを実証する報告と提言が、最近日本小児科医会から出されています。

◇テレビ漬け環境で育つ乳幼児

日本小児科医会の調査によると、「保護者が視線を合わせようとしても目を逸らす乳児の割合は、保育中に母親がテレビを視ている時間とともに増す。その割合は、1日に数時間のとき約38%、7~8時間でも90%、10時間以上では97%に達する。言語の発達に悪影響を及ぼすだけでなく、成長後の対人関係にも問題が残る」ということです。

テレビ漬け環境で育った乳幼児たちが、いま、他者と視線を合わすことを避け、対話の意思や能力を欠いた世代となって、小学校から大学までの教育現場に混乱をもたらしているかもしれません。

現代の大学生たちの「知的仮死状態」の原因を更に辿れば、他者と対等に視線を合わせ、心を開いて真摯に対話することを重んじようとしないこの国の風土がその根本にあって、それがテレビ漬けの家庭環境や目に余る携帯電話のマナーを現出させる土壌にもなっているのではあるまいか。

いま大学教師はそんな状況を宿命とあきらめねばならないのだろうか。

そう自問して始めたのが対話型授業の試みです。

◇ミニテスト方式の実施

対話型授業の試みには、Q & A方式とミニテスト方式がありますが、次にミニテスト方式の実施内容を紹介します。各種メディアや書物から、文系・理系を問わず、学生たちの興味を惹きそうな題材をとって正解のない設問を考え、「ミニテスト」と称して、授業前の短時間を割いて、学生たちに自分自身の体験に即した回答とコメントを書かせます。

そして、その結果をまとめた資料を次週の授業で配り、学生たちがそれぞれの考えを相対化して、より広く深い眼差しを共有する可能性と希望に気づかせます。

例えば、1昨年度の授業では、「技術と人間・携帯電話とそのリスク」に始まり、「科学と政治規制・遺伝子工学の倫理」まで、計26問のミニテストにより、計50名の学生たちが紙上対話を行いました。

◇試みの報告

多くの学科所属の学生たちは、最初は戸惑ったようですが、次第に積極的な関心を示すようになり、それに連れて教室の空気が一変しました。

教室は、教師1人が宙を見て一方的にしゃべる場ではない、「知の世界」をめぐる対話の場なのだ、という実感を年度の終わりには共有できたと思います。

「いまの学生たちの潜在的パワーは決して侮れない。問題は、それをどうやって引き出すか、教師の工夫と努力次第だ」というのが、この試みの報告の結論です。

ご静聴ありがとうございました。